

研究の概要

研究の全体構造

学校教育目標

あの丘を越えよ
— 自発・創意・責任と自治の精神高らかに —

【目指す生徒像】

- 1 主体性をもって挑戦する生徒（自己肯定感，自分らしさ，粘り強さ）
- 2 批判的思考力を発揮する生徒（論理性，寛容さ，柔軟性，多様性）
- 3 使命感をもって行動する生徒（実社会への関心，自分ごと，遅しさ）

・社会的背景・要請
・学校教育の今日的な課題

・生徒の実態
・教師と保護者の願い

【令和2年度研究主題】（三年次＝最終年次）

共に未来を切り拓く 開かれた個
— 批判的思考力を磨く授業実践 —

〔研究仮説〕

ミエルトークやICTを活用した協働的課題（問題）解決学習を通し，批判的思考力を磨くことによって，省みて考え自分自身を深めつつ，予測困難な未来社会の中で自分の役割を果たしていく，「未来を切り拓く開かれた個」が育つであろう。

〔研究内容〕

- (1) 批判的思考力を支える「態度」と「スキル」の育成
 - 支持的な風土をつくる道徳科の工夫改善
 - 思考を可視化する，『ミエルトーク』の工夫改善とICTの効果的な活用
- (2) 批判的思考力を支える「知識」の習得と「見方・考え方」の育成
 - 各教科等の特質に応じた協働的課題（問題）解決学習の工夫改善
 - 評価の質の向上につながる，NES評価の工夫改善

令和元年度研究主題（2年次）

共に未来を切り拓く 開かれた個
～ 批判的思考力の伸長を促す授業改善～

令和元年度研究主題（1年次）

共に未来を切り拓く 開かれた個
～ 批判的思考力を高める学習活動の工夫～

研究の構想

□1 はじめに

文部科学省の教育課程特別部会の論点整理の中の育成すべき資質・能力について「自立した人格をもつ人間として、他者と協働しながら、新しい価値を創造する力を育成するため、例えば、『主体性・自律性に関わる力』『対人関係能力』『課題解決力』『学びに向かう力』『情報活用能力』『グローバル化に対応する力』『持続可能な社会づくりに関わる実践力』などを重視することが必要」と述べている。科学技術の飛躍的な発展、環境問題の深刻化、グローバル化の加速など変化が激しく、予測困難な未来社会において力強く自立し、他者との共生の中で新しい価値を創造していく人材の育成が社会全体から求められている。

一年次研究では、①社会要請、②生徒の実態、③教師の見立て・願い、④秋田県の教育課題の4つの側面から、「批判的思考力」を本校で育成を目指す資質・能力に設定した。実践研究では、本校で考案したファシリテーショングラフィックの手法を取り入れた話合いの手法である「ミエルトーク」を中心的な手立てとして、各教科・領域（以後、各教科等）及び総合的な学習の時間の学習活動を一体的に結び付け、「批判的思考力」の育成に努めた。

二年次研究では、どの学年の生徒においても効果的に「批判的思考力」を高めるため、「ミエルトーク」の共通理解の推進と定着、「批判的思考力」を構成する態度面の伸長を促すと共に授業効果の実感と授業改善の手がかりを獲得するため、「NES評価」の活用を共通実践事項とし、批判的思考力の伸長を促す授業改善を進めてきた。

三年次研究となる今年度は、これまでグループ内での思考の可視化を主とした「ミエルトーク」による批判的思考力の育成を、一斉授業の中での「整理」、「分類」、「統合」の中に生かし、新たな価値に迫っていく。このように本研究は、新学習指導要領において重視されている「見方・考え方」を働かせた「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善、学校教育目標の実現のための「カリキュラム・マネジメント」の視点にも直接、関連のある研究と捉えている。

□2 研究主題について

共に未来を切り拓く 開かれた個

－批判的思考力を磨く授業実践－

1. なぜ、「共に未来を切り拓く 開かれた個」が必要なのかー社会的背景ー

2015年8月に中央教育審議会から発表された「論点整理」に示されている2030年の社会、及び2016年11月に経済産業省の産業構造審議会2020未来開拓部から発表された「平成27年度報告書～The Japan Way～」に示されている第5次産業革命にあるように、生徒たちの未来には変化を予測することが困難な社会が待っている。このような急激な社会的な変化が進む中で、生徒たちが社会の変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手として、予測不可能な未来社会を自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を一層確実に育成することが求められている。

本校では、平成21年度の研究主題である「開かれた個の学びの育成」をスタートに、生徒一人一人の「開かれた個」に重点を置いてきた。本校での「開かれた個」は、「他者や社会、自然・環境との関わりを通して、省みて考え、自分自身を深めつつ、集団生活の中で一定の役割を果たしながら生きていく生徒」と捉えている。予測困難な未来社会の中で、省みて考えながら、新たな価値を創造する「開かれた個」を我々は育て上げなくてはならないと考える。

2. なぜ、「批判的思考力」を高めることを目指すのか

社会背景の中で、国際化・情報化の進展や価値観が多様化する中で、生徒を取り巻く環境は急速に変化している。生徒一人一人は、その変化に主体的に対応し、生きていく必要がある。そのような世界の中で生きていくためには、論理的思考力を育てていく指導が必要であると考え。また、平成27年から「Ⅰ 人間関係形成・社会形成能力」「Ⅱ 自己理解・自己管理能力」「Ⅲ 課題対応能力」「Ⅳ キャリアプランニング能力」の4つの視点から基礎的・汎用的能力に関するアンケートを実施し、形成的な評価の1つの手段として役立てている。その中で、論理的思考力に関する調査項目「Ⅲ 課題対応能力」には3つの質問が含まれており、その質問項目とアンケート調査の一部から十分に論理的に考える力が備わっているとはいえない結果となっていた。社会の要請と本校生徒の実態から、論理的思考力の育成が不可欠ではあったが、真に求められている力は、複雑な問題に対して、他者や社会、物、環境などとの関わりの中で発揮される論理的思考力である批判的思考力を育成することである。

これは、本校生徒にとって、秋田県全体にとって、社会全体にとって最も有用である、という結論にいたり、批判的思考力を高めることが重要であると考えた。

□3 これまでの研究から

1. 研究部のアンケートより

平成27年4月より、4項目12の質問について、基礎的・汎用的能力を生徒自身がどれくらい発揮できているか分析し、さらに平成30年4月からは、【資料1】に示す「Ⅴ 批判的思考力」の項目と5つの質問を追加し、研究検証材料の一つとしている。

また、令和元年6月と11月に平山・楠見（2004）の「批判的思考態度テスト」を参考に、生徒の批判的思考に関わる情意的側面の測定をした。【資料2】に示す項目のそれぞれの質問に対して、生徒は「いつもしている」、「時々している」、「あまりしていない」、「ほとんどしていない」から一つ選び、回答した。

「Ⅴ 批判的思考力」

- ⑬ 話し合いをするときは、何が問題になっているのか、を考えるようにしていますか。
(問題点の焦点化)
- ⑭ 相手の意見を聞く時は、事実と意見を区別して考えるようにしていますか。
(事実と意見の区別)
- ⑮ 相手が述べている意見と理由がきちんとつながっているか、考えて聞くようにしていますか。
(意見と根拠の整合性判断)
- ⑯ 相手の意見を聞いて、自分の考えが正しいのかを考えるようにしていますか。
(他者意見を参考にした内省的思考)
- ⑰ 自分やグループの意見をまとめるときは、全体のつながりを考えてまとめていますか。
(最適解、納得解の検討、決定)

【資料1】 生徒アンケート調査 質問内容

<論理的思考の自覚>

- ① 複雑な問題について順序立てて考えることが得意だ。
- ② 考えをまとめることが得意だ。
- ③ 物事を正確に考えることに自信がある。
- ④ 誰もが納得できるような説明をすることができる。
- ⑤ 日常生活で何か複雑な問題を考えると、混乱してしまう。

<探究心>

- ⑥ いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい。
- ⑦ 生涯にわたり新しいことを学び続けたいと思う。
- ⑧ 新しいものにチャレンジするのが好きだ。
- ⑨ 様々な文化について学びたいと思う。
- ⑩ 自分とは違う考え方の人に興味をもつ。

<客観性>

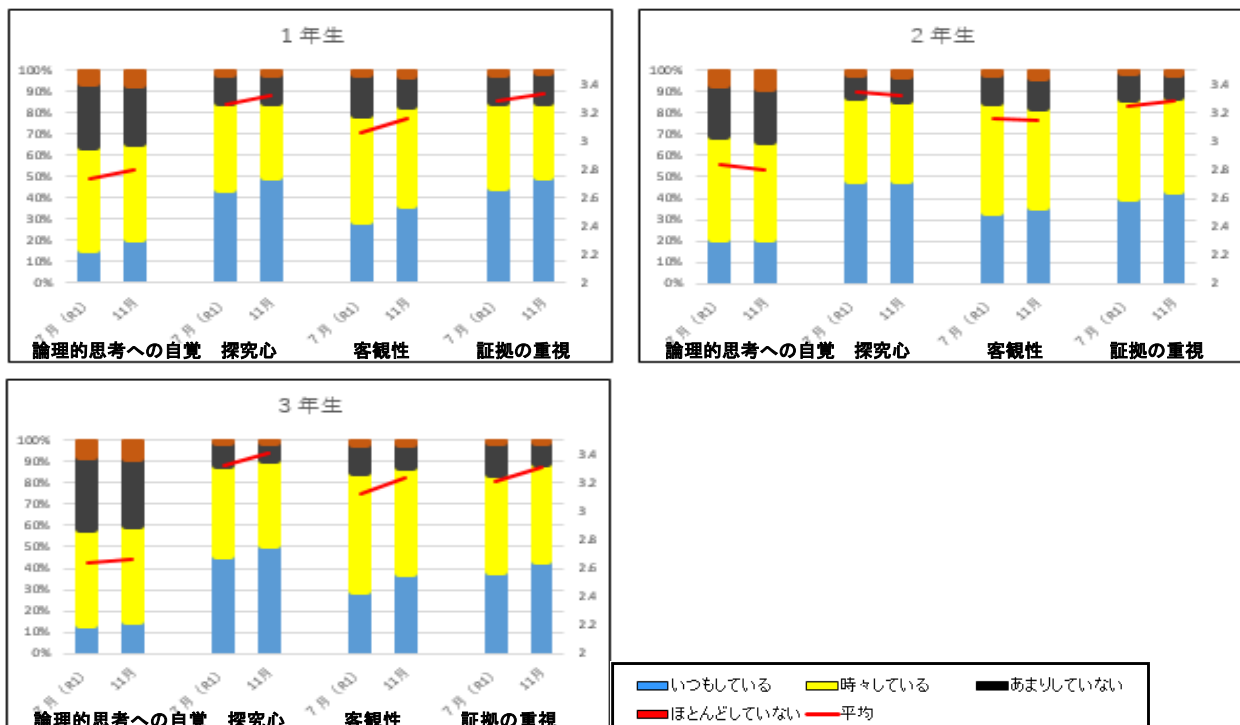
- ⑪ いつも偏りのない判断をしようとする。
- ⑫ 物事を見つめるときに自分の立場からしか見ない。
- ⑬ 物事を決めるときには、客観的な態度を心がける。
- ⑭ 1つ2つの立場だけではなく、できるだけ多くの立場から考えようとする。
- ⑮ 自分が無意識のうちに偏った見方をしないか振り返るようにしている。

<証拠の重視>

- ⑯ 結論をくだす場合には、確たる証拠の有無にこだわる。
- ⑰ 判断をくだす際は、できるだけ多くの事実や証拠を調べる。
- ⑱ 何事も、少しも疑わずに信じ込んだりはしない。

批判的思考態度テスト項目 (平山・楠見2004)

〔資料2〕 生徒アンケート調査 質問内容



1・3年生においては、すべての項目に対して肯定的な回答をしている生徒の割合が増加している。しかし、2年生においては、「論理的思考への自覚」「探究心」「客観性」の3項目が減少傾向を示している。2度の調査では、はっきりしたことはまだ言えないが、どの学年も、探究心は非常に高いことが分かる（最大値4.0）。楠見は「さまざまな情報を求めようとする探究心は、自分自身があらかじめ持っている意見とは異なることを示す情報も、頭ごなしに拒否してしまうことなく公平に受け入れることにかかわっている」としている。また、「証拠の重視」がどの学年の割合も増加していることから、批判的に考える根拠としての証拠を重視し、これまでの学習の知識や経験を基にして話し合い活動をしていたと考えられる。

2年間の実践で、道徳（重点項目「自主、自立、自由と責任」）において、相手の心情を考えて話合うことの積み重ねや、特別活動での「ミエルトーク」（現在は全教科での取組）による批判的思考のプロセスのスキルの向上につながったと考えられる。しかし、ある程度向上してはいるものの「論理的思考への自覚」については、どの学年も他の項目より0.5低いことが見て分かる。楠見は、「論理的思考の自覚」を「論理的思考の重要性を認識し、自分自身が論理的な思考を自覚的に活用しようとする態度」としている。「探究心」は高いものの、「論理的思考への自覚」が低いことから、論理的に考え、協働的な学習の中で証拠を重視し考えてはいるものの、それを相手に伝えることに自信がもてていないことの表れと考えられる。ただ、若干ではあるが、割合が向上していることから、生徒の「自己効力感」を向上させるためにも、「ミエルトーク」の中で、自由に発言ができ、協働的課題解決学習を通して、「分かったつもり」から「分かった」へ、「知っている」から「知っていることをどう使うか」へ向かわせていきたい。

2. 本校職員の視点から（公開研究協議会の教師の振り返りから）

2年間の取組で、生徒はグループ活動の中での「ミエルトーク」の話し合いを基に、最適解へ導く力は付いてきていると考えられる。しかし、グループの考えを全体の場で示したとき、それぞれの結論を整理、分類、統合していく教師のファシリテーターとしての役割が十分にできてないことが挙げられている。本校職員の公開研究会での成果と課題は次のとおりである。

【成果】

- ・ 「個」の時間を確保することでミエルトークの中での「個→グループ→全体」へと広げることができた。
- ・ 全授業で共通の取組をしたことで、批判的に考える思考の習慣が身に付いた。
- ・ ミエルトークを用いての話し合いは、他者を意識し、根拠に基づいて最適解を見つけ出すことに有効であった。
- ・ ミエルトークによって、「問い」の練り上げと疑問の焦点化につながった。

【課題】

- ・ 教師側のミエルトークの定着が不十分。
- ・ ナンデさんのスキルアップ。
- ・ ミエルトークが本当にねらいを達成するために必要だったのか。
- ・ 教師のファシリテーション力の向上。
- ・ 新たな価値の共通理解

3. DOVEACADEMY（総合的な学習の時間の研究発表会）における生徒の姿から

令和元年10月11日（金）～12日（土）に開催したDOVE ACADEMY 2019において、本校体育館を会場に全校生徒ディスカッション（全校ミエルトーク）に取り組んだ。

各学年の男女1名ずつ計6名でグループを構成し、『あなたの「あきたぷらいど」を見つけよう』というDOVE ACADEMY 2019のテーマについてミエルトークを行った。1年生は、「働く意義」について、2・3年生は「自分の生き方」について総合的な学習を通して研究してきた。その中で、自分たちが調べたことや出会った人たち、様々な体験から自分たちが住んでいる秋田のどんなことを誇りに思い、何を発信していけば良いかを追究した。これまで「少子高齢化」を秋田のネガティブな部分と考えていたことを「お年寄りが多いことで、秋田の伝統を残しつつ、秋田を変えようとする若者達によって新たな取組がなされ、新しい秋田像を考えられる」など、学年を越えて意欲的に話し合い活動を進めていた。3年生がミセルさんとアシスタント役を務めたことで、1・2年生からの話を中立の立場で話を引き出し、話し合いの内容を見える化し、結論をまとめ上げ、グループの考えを最大限に引き上げていた。

各グループでまとめた結論を代表生徒が大型ホワイトボードを用い、3年生がファシリテーターとなって進めていく中で、多くの意見を整理・分類・統合しながら1つの方向性に収束していこうと努めていた。それは、1つの答えに押し進めるのではなく、一人一人の考えや意見を根拠を基に批判的に聞き、自分の考える新たな「あきたぷらいど」につなげている姿は、この2年間の成果と言える。けれども、個々での話し合いも一人一人がどのような知識をもち、その根拠を批判的に考え自信をもって話をしているかという点はまだ十分とは言えない。これまで同様に、グループでの「ミエルトーク」を大切にすることは当たり前だが、ねらいを達成するための必要感をもった「ミエルトーク」につなげていっているかの「つかみ」の部分再度検討していく必要がある。

□4 研究構想について

1. 研究仮説

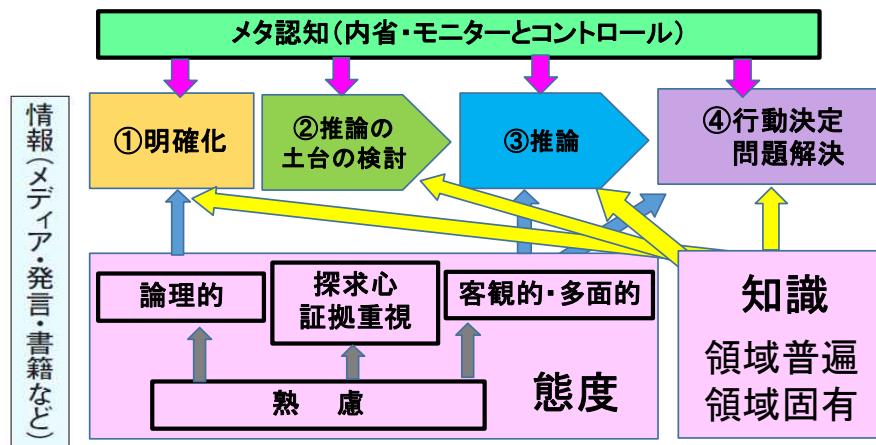
ミエルトークやICTを活用した協働的課題（問題）解決学習を通し、批判的思考力を磨くことによって、省みて考え自分自身を深めつつ、予測困難な未来社会の中で自分の役割を果たしていく、「未来を切り拓く開かれた個」が育つであろう。

生徒たちが予測困難な未来を切り拓いていくために必要な資質や能力は、学校を社会の縮図、学級をその社会の一部と捉え、その中で人と人との関わりによって高められていく。人と人との関わりの中で、多くの情報を共有し、精査しながら様々な視点から問題の本質に迫ることは、新たな価値に気付く、社会の変化に柔軟に対応できる人材育成につながる。

学習活動も同様に、級友と共に教科の本質に迫る課題解決を目指す中で、様々な見方や考えなど幅広い価値に触れ、物事に対して真摯に向き合い、正確に理解、判断しようとする姿勢が必要になる。また、最適解に近づく方法の習得と共に、自分自身の考えを精錬していくことが新たな価値を創造する資質・能力を高めるために必要である。そのため、多くの情報の中で「正しい事は何か」「何を根拠に考えていけば良いのか」「結論をどう生かすのか」など正しい情報を見極め、取捨選択し、活用に生かそうとする批判的思考力を育成する事が重要である。

2. 本校で育成を目指す資質・能力「批判的思考力」の具体像

楠見氏は、批判的思考は「知識」「スキル」「態度」に支えられているとしている。知識には、「演繹」「帰納」「類推」「問題解決などの類推の方法」などの、分野に関係なく、身に付けておくべき知識である領域普遍のものと、テーマに関わる、その分野固有の知識である領域固有のものとし、スキルを[資料3]中段の「①~④」で示している。一方態度は、直面する問題やテーマを十分検討し、熟慮、探求し、証拠に基づいて客観的に判断することを示している。



[資料3] 批判的思考の構成要素とプロセス(楠見, 2015)

本研究では楠見等の研究を参考に、本校で育成を目指す資質・能力「批判的思考力」を知識を土台とした「態度」「スキル」「思考力」によって構成されていると捉え、(1)態度とスキルの育成、(2)教科の特質を生かした授業展開、(3)全体的能力の見取りの三つの手立てを基に研究構想〔資料4〕を設定した。さらに、令和元年12月文部科学省の「教育の情報化に関する手引き」の中で『「情報活用能力」を学習の基盤となる資質・能力と位置付け、教科等横断的にその育成を図る』とした。また、「その育成のために必要なICT環境を整え、それらを適切に活用した学習活動の充実を図ること」と示している。特に情報教育としてのICTの活用においては、大量の情報の中から必要な情報を取捨選択し、分析・判断する力が必要となる。そこで今年度の研究構想の中に(4)ICTの活用を含め、四つを研究の手立てとした。

「態度」「スキル」「思考力」それぞれの本校定義は以下の通りである。

○「批判的思考力」構成要素の本校定義

「態度」：適切な情報を活用し、他者と共に協力しながら、よりよい創造を導こうとする態度。
具体的には「客観的で冷静な判断」、「誠実さと他者の尊重」、「探究的・追究的思考」の三つの態度を含めたものと共通理解している。

「スキル」：情報の構造化による明確化や分析、疑問や問題の焦点化、結論の導きなど、論理的な探究や推論の方法を適用するための手続きに関する知識や考え方、方法。

「思考力」：各教科等の特質が反映された、教科(学問)領域の見方・考え方。学力評価の対象。

※ 本校では、「見方」を「教科で身に付ける知識・技能等を統合および包括する『キーとなる概念』」、「考え方」を教科ならではの認識や思考、表現の『方法』と捉えている。

本校で育成を目指す「批判的思考力」は批判的な思考、すなわち考え方の概念だけではない。共に未来を切り拓いていくための資質・能力であり、開かれた個に必要な資質・能力である。グローバル化の進んだ変化の激しい未来社会を想定した態度やスキルを含め、本校で育成を目指す資質・能力である「批判的思考力」を以下に示す三つの資質・能力を含めた思考力とした。

本校で育成を目指す資質・能力「批判的思考力」

- ① 論理的で偏りなく考える力
- ② 他者の立場で考え、議論する力
- ③ 新たな価値を創造する力

- 1) 「論理的に偏りなく考える力」を発揮している生徒の姿（例）
 - ① 結論と課題を分けて、頭の中を整理している。
 - ② 全体を俯瞰(ふかん)して、物事を冷静に判断している。
 - ③ 根拠となる情報を探し続け、客観的に考察している。
 - ④ できる限り正確な情報を根拠にして、自分の考えを内省している。
 - ⑤ 根拠となる証拠や理由などが不足しているときは、判断を保留し、熟慮している。

- 2) 「他者の立場で考え、議論する力」を発揮している生徒の姿（例）
 - ① 謙虚に相手の話を傾聴し、伝えたいことを正確に聞き取り、理解している。
 - ② 自分の考えと他者の考えを比較し、共通点や相違点を明確にしている。
 - ③ 他者を説得するために必要な情報を明確にし、その情報を収集・吟味している。
 - ④ 自説に固執したり、偏見で他者や物事を判断したりしていない。
 - ⑤ 他者の考えを寛容に受け止め、自分の考えや判断に柔軟に取り入れている。

- 3) 「新たな価値を創造する力」を発揮している生徒の姿（例）
 - ① 知識や事実、結果などを比較、分類、統合するなどして関連付けている。
 - ② 複数の事実や結果などの共通点を見だし、一般化したり、概念化したりしている。
 - ③ 事象がもつ多様な側面に気付いたり、同じ側面を多様な角度から捉えたりしている。
 - ④ 課題解決や目標達成後に、最適解を探したり、技能を向上させたりしようとしている。
 - ⑤ 学習で身に付けたり、鍛えたりした見方・考え方を、新たな学習に生かしている。

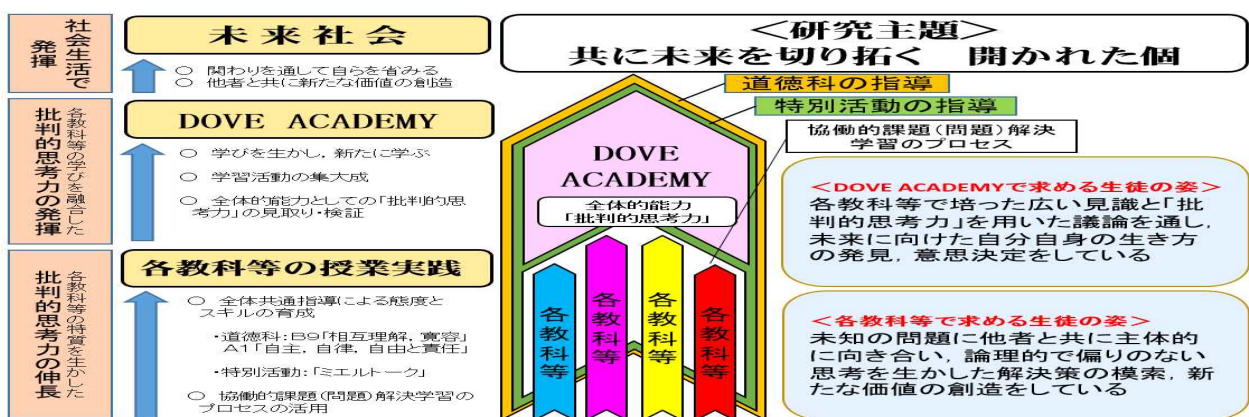
本校で捉える価値

本校では、新たな価値の創造を「学習することで得た見方・考え方を新たな学習に生かす」こと

3. 全体研究構想

(1) 批判的思考力を支える「態度」と「スキル」を育む全体共通指導内容の設定

本校で育成を目指す「批判的思考力」を育むためには、自らの考えを支える情報の収集や解釈、活用にとどまらず、他者の気持ちや思考の理解、共通点や相違点の把握、他者に受け入れられる論理的な発信など、他者とのコミュニケーションの中で考えをまとめていくことが重要となる。そのため、道徳科の重点指導内容項目と特別活動でこれまで研究を進めてきたファシリテーショングラフィックの手法を用いた話し合い活動（本校名称：「ミエルトーク」）を全体共通指導内容とし、各教科等の指導の基軸とした。



〔資料4〕研究構想

① 道徳科による全学年共通の重点指導内容項目の設定

道徳科による全学年共通の重点指導内容項目として、B(9)「相互理解, 寛容」とA(1)「自主, 自律, 自由と責任」を設定した。他者との関わりの中で建設的に批判的思考力を働かせるためには、相手の主張を肯定的に受け止める態度や、相手の心情を考えて話し合いを進めようとする態度が重要と考えたからである。また、お互いに信頼し合える関係が築かれてこそ、自己の考えを発信し合い、多面的・多角的な問題分析や問題解決の糸口を焦点化する検討を重ね、最適解を導く、批判的思考力が発揮されると考えるからである。

② 「ミエルトーク」の共通指導

楠見等の研究に示されているように、情報の明確化、情報の分析はそれに続く推論や行動決定を適切に行うためには必要不可欠である。情報を可視化し、問題点の焦点化や分析を行うことは課題の共有化につながるとともに隠れた問題点の把握や最適解の創造に大きな意味をもつ。故に、ファシリテーショングラフィックの手法の共通指導は本研究の重要な鍵である。

そこで本研究では、特別活動部で研究を進めてきたファシリテーショングラフィックの手法に、道徳部で研究を進めてきた自分や他者の考えや意見の根拠を丁寧に話し合う手法を取り入れた話し合い活動の形式である「ミエルトーク」を考案し、全校で実践してきた。

【「ミエルトーク」と一般的な話し合い活動の違い】

「ミエルトーク」と可視化しながら進める話し合い活動の決定的な違いは2点ある。1点目は「進め方」であり、2点目は「役割分担」である。詳細は【資料5】ミエルトークの特徴に示すが、それぞれの活動内容や分担した役割に込められた意味、ねらいを教師、生徒共にしっかりと共通理解することが大切であり、研究課題の一部となっている。

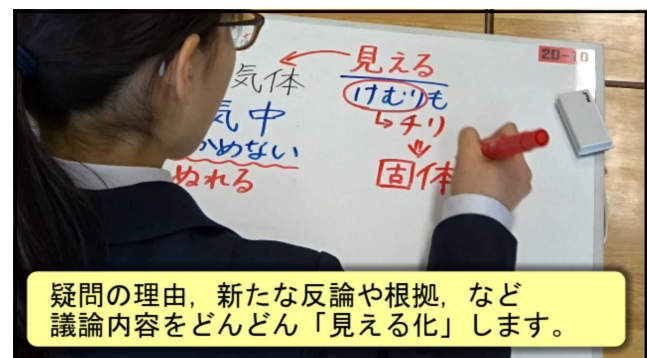
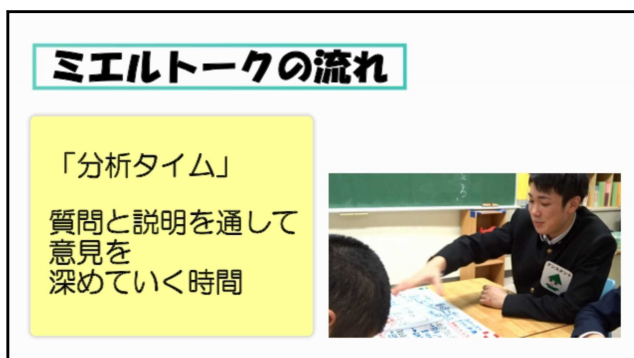
これまで、「教室用掲示ボード」や「役割分担キャラクター」を制作し、生徒の活動内容理解に努めてきたが、新たに在籍生徒の協力の基、「ミエルトーク」のマニュアルとなるオリジナルビデオを制作し、共通理解と定着を図っている。



〔図1〕役割分担キャラクター



〔図2〕教室掲示用ボード



〔図3〕「ミエルトーク」マニュアルビデオ

進め方 について

No	活動名称	活動内容	ねらっている学習効果
1	シンキングタイム	・話し合い活動のテーマに沿って、(最初の)自分の考えをもち、考えをまとめる。	・自分の考えをもつことで、主張タイムを先頭に、意味のある話し合い活動の成立。 ・授業終末時の振り返り活動における内省の充実による成長。 学習活動充実への絶対的布石
2	主張タイム	・シンキングタイムでまとめた自分の考えを順番に説明する。 ・結論のみ説明する。理由は話さない。 ※他者への質問は認めない。	・個々の発信力、態度の鍛錬。 ・偏らない話し合い活動の成立。 ・他者理解を兼ねた、自己意見の分析⇨内省のきっかけ。 ・思考視野の広がり。 発信力の鍛錬、協働活動構築
3	分析タイム	・質問と説明を繰り返し、意見を深め合う。 ・話し合い内容を構造化する。 ・問題解決の糸口を模索する。	・多様な意見交流による、多面的、多角的な思考の広がり、深まり。 ・意見の整理、問題点の焦点化、問題解決の糸口の焦点化。 ・証拠、根拠に基づいた論理的な思考による解の構築訓練。 ・個々の発信力、態度の鍛錬。 批判的思考力の向上
4	まとめタイム	・グループとしての結論をまとめる。 ・最適解、納得解を検討、決定する。	・意見同士をつなげ、新しい意見として応用的な知識の活用。 ・他者と意見の落としどころを見付け合う訓練。 深い学び、新たな価値の獲得

※ 「ミエルトーク」は批判的思考のスキル面を伸ばすことと同時に、生徒の主体的な発信態度の育成もねらいのひとつとしている。

役割分担 について

「ミエルトーク」の役割は下の3種類。「批判的思考力」を高めるため、役割分担は輪番制とし、すべての役割に備わっている力を身に付けさせるように指導を継続している。

No	役割名称	担当活動
1	ミセルさん (1名)	○司会, 進行 ○話し合い内容を可視化, 構造化 ○意見の集約, 分析, 問題点の焦点化 ○発表活動での説明 ※ 他者に対して中立でいることが大前提。
2	アシスタント (1名)	○ミセルさんの補助(話し合いが滞らないよう他者に声掛け, ミセルさん発言時に代理記入) ※ ミセルさんと一緒に司会, 進行を行ってもよいことにしている。
3	ナンデさん (2名)	○出された意見や根拠を掘り下げる。 ○誤りや矛盾がないか質問し続ける。

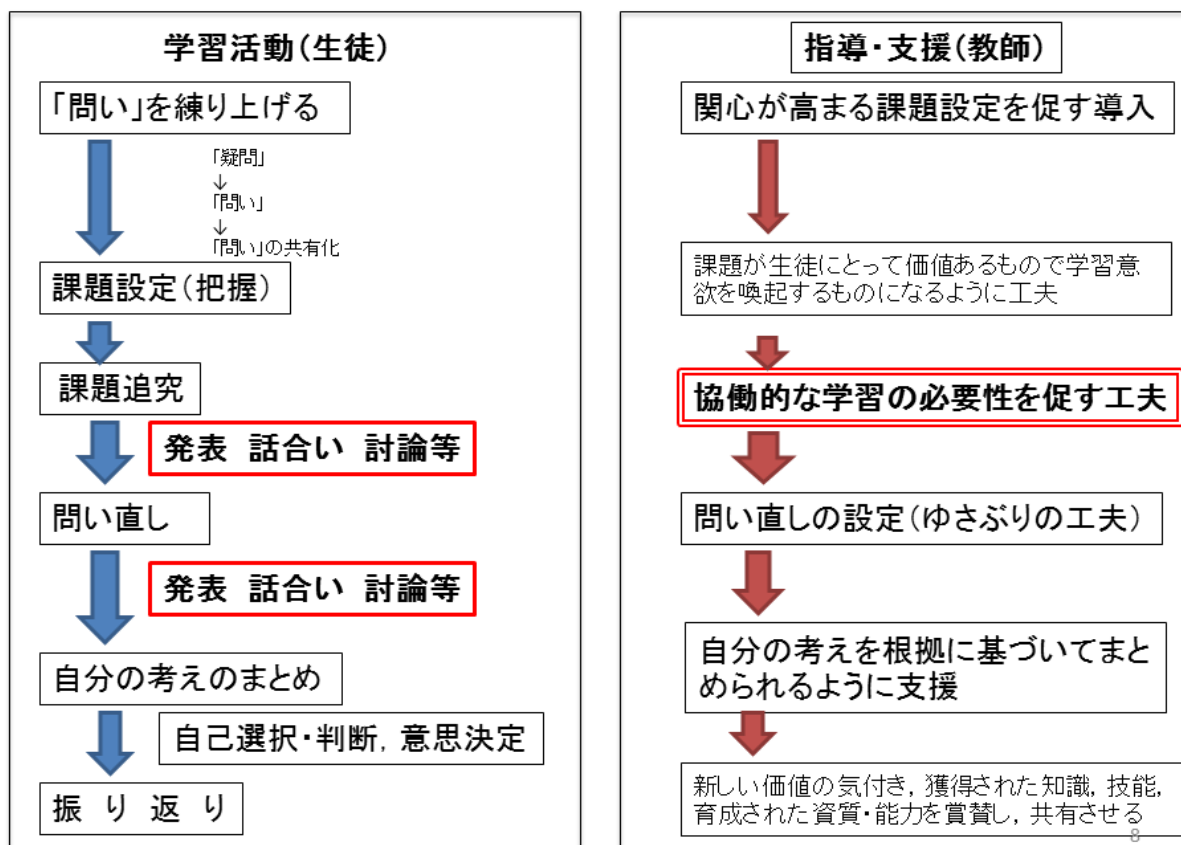
(2) 協働的課題（問題）解決学習のプロセスの活用による各教科等の特質を生かした授業実践

①協働的課題（問題）学習による「スキル」の育成

各教科等の授業実践においては前研究で考案、実践を重ねてきた「協働的課題（問題）解決学習のプロセス」〔資料4〕を生かして、授業展開を進めている。

これは、本研究が育成を目指す「批判的思考力」の「スキル」の育成につながっていくと考えられる。他者との関わりの中で、「疑問を発するスキル」や「課題解決の際の信憑性を判断するスキル」、「内省を伴う自己決定につなげるスキル」など「協働的課題（問題）解決学習のプロセス」が批判的思考力を育成する上で重要な取組となる。詳しくは、研究報告84号を参照していただきたい。

協働的課題（問題）解決学習の授業プロセス



〔資料6〕協働的課題（問題）解決学習の授業プロセス

②NES評価の活用による「態度」面の伸長支援と授業改善

① NES評価のねらい

本校の「批判的思考力」を構成している「態度」「スキル」「思考力」の中で最も成長の見取りと支援が難しいものは「態度」と考えている。「スキル」は情報同士の関係性や根拠等の構造化、問題点の焦点化等についてミエルトークを通して指導と評価はでき、「思考力」は各教科等の指導と評価規準による判断ができる。しかし、「客観的で冷静な判断」「誠実さと他者の尊重」「探究的・追究的思考」が含まれる「態度」は生徒個々の内面であるため、客観的または量的な評価は難しい。我々が考えた、生徒自身が態度を向上させる仕掛け、さらに言うと「生徒が無意識のうちに自分自身の態度を磨いてしまう仕掛け」こそがNES評価である。

本校では、NES評価を「授業を通して感じたことを、プラス思考でまとめる振り返り」としている。NES評価の主なねらい（効果）は、学びに対する自己効力感や自己有用感を高めながら、自分の学びを省みて考え、修正したり、調整したりする力を高めることである。

NES評価を通して、論理的に考えることの重要性に気付き、今後意識的に論理的に考えていこうとする「態度」の育成につながっていく。また、友達との関わりの中で発見した新たな価値に気付き、もっと探究していきたいという「態度」の育成にもつながっていく。

したがってNES評価は、それぞれの記号にABC評価のような上下関係の評価ではなく、全てがプラス評価（言い換えれば全てがA評価）と位置づけることで、生徒の振り返りがどんな「態度」の育成につながっているかの見取りとなる。

NES評価の観点

N：もっと向上したい	→向上したい点が具体的に記述されている。
E：新しい自分を発見できた	→どんな発見があったのか記述されている。
S：自分の力を発揮できた	→どんな点に満足できたのか記述されている。

記号	意味	具体的な生徒の状況
N	<p>もっと向上したい</p> <p>Need Improvement</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容(学習対象)に対する興味関心の高まり ・技能に対する向上心の高まり ・学習活動, グループ活動への向上心の高まり, → ミエルトークであれば, 対活動ではなく対内容 ・学習活動への欲求(時間的, 物理的) ・学習内容へのつまづき, 自己改善への欲求
E	<p>新しい自分を発見できた</p> <p>Excellent</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の能力への気付き, 向上⇐新しい自分の発見 ・他者理解力の向上, 他者のいいところへの気付き ・批判的思考力の向上 ⇐ 内省力の向上 ・学びを深めていくことでの新しい自分の発見 ・自己肯定感の向上
S	<p>自分の力を発揮できた</p> <p>Satisfactory</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習活動, グループ活動への参加意欲 ・学習活動, グループ活動の進展への満足 ・既習内容の理解と自信 ・学習への満足 ・自己有能感の向上

〔資料7〕各観点における具体的な生徒の状況

記号	意味		<態度> に関わる具体的な態度
N	<p>もっと向上したい</p> <p>Need Improvement</p>		<p>「客観的で冷静な判断」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活用能力の向上 ・視点を明確にした比較・検討 ・困難克服の精神
E	<p>新しい自分を発見できた</p> <p>Excellent</p>		<p>「誠実さと他者の尊重」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・協力的な人間関係 ・協働活動の充実 ・他者との交流を通じた自分の発見
S	<p>自分の力を発揮できた</p> <p>Satisfactory</p>		<p>「探究的・追究的な思考」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・探究心, 追究心の継続 ・新たな価値の発見・創造 ・既習内容の活用

〔資料8〕「NES評価の指標」と「態度に含まれる具体的な態度」との関連

㊦ 授業効果の実感や改善の手がかりの獲得（NES評価の2面性）

このようにNES評価は生徒にとっては「自己効力感や自己有用感を感じながら授業を振り返ることで、生徒自ら自身の主体性を伸ばしていく」ことのできる振り返りであるが、もう1点、大きな効果特徴を要している。

それは、授業効果の実感や改善の手がかりの獲得ができる、という点である。我々教師は、生徒のNES評価から「生徒が授業のどの部分でどのようなプラス思考が働いたかを知る」ことのできる。それはすなわち、「授業効果の実感や改善の手がかり = 生徒から私たちに向かって授業の評価」を得られることに他ならない。

NES評価によって授業に関する以下の4つの手がかりを読み取ることができる。

【NES評価から読み取れる4つの手がかり】

- ① どのようなプラス心情が働いたか
- ② どの授業場面で働いたか
- ③ なぜ働いたか
- ④ 批判的思考力の態度の育成にどのようにつながったか

㊧ NES評価を活用した授業全体の見取り

各教科・領域の授業では、まとめの学習過程において、NES評価カードを用いて自己評価を行ってきた。生徒は初めに具体的にもっとよくしたい点は何なのか、新しい自分のどんな発見があったのか、どんな点に満足したのかなどを各教科・領域の重点に基づいて具体的に記述する。その後、自分の学習に対する満足感や成就感などを〔N・E・S〕の3観点で分別する。生徒一人一人のNES評価の記述から、教師側は生徒の「情意面」や「認知面」を読み取り、次時の授業構想につなげていく。

(3) 全体的能力としての「批判的思考力」を見取る、総合的な学習の時間の位置付け

本研究で育成を目指す「批判的思考力」は学習の場や生活、最終的には社会の中で汎用的に発揮できる全体的能力であると考えます。“全体的”と表現したのは、我々が育成を目指す「批判的思考力」は一部の教科等で培える力ではなく、各教科等の特質を反映した学びが融合された力だからである。言わば、「開かれた個」であるために必要な資質・能力だからである。

我々は生徒がこの全体的能力としての「批判的思考力」を発揮する場、生徒の成長を見取る場の設定が必要と考え、例年10月に開催してきた総合的な学習の時間の研究発表会（DOVE ACADEMY）を全体的能力としての「批判的思考力」を、生徒は発揮する場、教師は見取る場として位置付けてた。

(4) ICTを活用した効果的な分析力の育成

①大量の情報を取捨選択し、情報の相違に対する批判的な分析力の育成

生徒にとっての情報源は、これまで学習で身に付けた知識やスキルだけでは無く、個人の経験も含まれてくる。ここで言う情報経験は、新聞、書籍、テレビ、インターネット、SNSなどである。生徒にとっての情報経験は、多様化され大きく発展してきている。

批判的思考力を育成するにあたって、「証拠、根拠に基づき論理的」に考えるためには、大量の情報から必要な情報を取捨選択し、その信憑性を吟味し、活用していく力が必要である。

- ⑦ 多角的な立場から情報を収集し，相違に対して批判的に考える力
- ④ メディアやコンピューター，インターネットによってソフトウェアやプログラムを利用できる力だけでなく，情報を分析・評価し，活用できる力

②議論や推論を支える根拠の信頼性を判断する力の育成

「ミエルトーク」では，情報を可視化し，問題点の焦点化や分析を行う。議論や推論を支える根拠となる情報源は，全員が共通ではない。これまでの学習の土台になっている領域固有の知識であれば，全員が共通しているため，議論の信憑性は判断できる。けれども，個々にもっている情報源が違う場合，「自分の結論と相手の結論が一致しているとき，その結論を妥当と判断」したり，「情報源の中から自分の考える結論に至る情報だけ収集」したりすることで最適解から外れていく場合が考えられる。

そのため，「ミエルトーク」の中での「分析タイム」は重要になってくる。また，ミエルトークでのミセルさんの役割も重要になってくる。ナンデさんの意見に対し，その情報を鵜呑みにせず，根拠の信憑性について掘り下げていくことが必要である。ICTの活用によって，得たい情報は瞬時のうちに，大量に見つかってくる。その情報をこれまでの知識（領域固有の知識，領域普遍的な知識）と整合性を図ることで，批判的思考力の育成につなげていく。

- ⑦ 自ら効果的なICTを選らび，信頼できる情報を選び活用する力
- ④ 自らの情報活用を記録し，振り返りを基に，根拠の信憑性を判断する力

□5 3年間の研究の流れ

一年次

これまでの実践をベースに、批判的思考力を高める授業のねらいや方法、具体的な手立てを明確にし、各教科等の理論を提案する。(理論の提案)

→ 単元に応じて、「批判的思考力」の視点から生徒の学習展開を明確にし、資質・能力を効果的に培う、情報の明確化と分析、推論、行動決定の具体的な場面を意図的に設定する。

DOVE ACADEMYを通し、全体的能力としての「批判的思考力」の伸長を検証し、カリキュラムマネジメントの視点から次年度に向けた改善案を立て、以後の実践につなげる。

→ 全体的能力としての「批判的思考力」の伸長を測る評価規準を検討していく。検証活動後、評価規準の妥当性についても再検討を進める。

(評価基準の準備についても検討したい)

「批判的思考力」の伸長を見取る手立てを考案し、データを蓄積する。

→ 毎月実施している生徒アンケートにおいて、「批判的思考力」に関する質問を増やし、本研究の検証の一つとする。また、全体及び各教科・領域の理論修正に生かしていく。

二年次

・1年次研究の成果と課題を分析し、全体及び各教科・領域の理論を修正し、実践を蓄積する。

→ 生徒の実態を踏まえ、「批判的思考力」を育む実践において、教師のどのような手立てが資質・能力を高めることにつながったのか、各教科等のねらいや本質、生徒の資質・能力の状態と結び付けて検証する。また、そこから見えてきた課題を構造化し、理論を修正する。

・「批判的思考力」の伸長を見取る手立てを考案し、データを蓄積する。

→ 毎月実施している生徒アンケートにおいて、「批判的思考力」に関する質問を増やし、本研究の検証の一つとする。また、全体及び各教科・領域の理論修正に生かしていく。

三年次

・明確な理論のもとに授業提示をする。

→ 「この単元のねらいはこう…であり、そこに踏み込むためにこのような資質・能力が必要であり、このような手立てを講じて授業展開を図った。授業（または振り返り）では、〇〇という姿、発言（記述）が多く見られ、授業のねらいが十分達成されたことが明確であり、資質・能力の育成と共に手立ての有効性が確認できた」といった具体的な事実による検証を基に理論を構築し、それを他の単元で具現化する授業を提示していく。

本校の研究スタイル

教育研究において、実践は理論のはるか先をいくものである。だからこそ、本校では日常の授業実践の積み重ねから見取る「生徒の姿」に基づいた実践研究に取り組もうと考えた。その実践研究においては、問題が分割され限定されたものでなくては、検証が難しく、しかも極めて曖昧なものとなる。日常の授業やそこに見る生徒の姿から問題を設定することこそ、学校現場に求められる研究ではないだろうか。授業における生徒の姿を見取り、そこにどのような学びが存在し、どのような教育効果が認められたか、また、より一層教育効果を高めるためには何が必要なのか、どのような手立てを講じればよいのかなど、本校の研究は授業に極めて寄り添ったものである。

1 生徒の視点に立った学習指導

教師が生徒をどの程度うまくコーディネートできたかを考えるのではなく（これを軽視するわけではないが）、生徒が何をどのように学んだかという視点に立って指導方法や授業づくりを研究することを授業研究としている。

2 実践段階の研究

日常の教育実践の中から教師の「問い」を見付ける。学校現場の教師にしかできない、教師だからできる実践段階の研究に取り組む。それは、即ち教員自身のステップアップになる研究であり、さらに、ここで検証されたノウハウが他校での実践にも生きるような研究である。生徒の姿や授業を基にした具体的な実践例を提示することによって、参観された先生方の明日からの授業でも活用できるものを目指す。各教科で作成する具体的な授業展開が見える「授業実践記録」の有用性はそこにあると考える。

3 習得・活用・探究

主体的な姿勢・態度だけでは学びは深まらない。「知らないものは見えない」からであり、「見えないものはつながらない」からである。新しい概念や視点を養うために必要な知識と物事を捉える視点や考え方はしっかりと教える授業をする。それがあからこそ、質の高い学びを生み出せると考える。

4 生徒の学びと教師の学びの構造

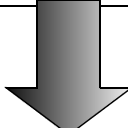
本校が取り組む「問いの共有化」「問い直し」「協働的な課題（問題解決）学習」「ミエルトーク」等、教師が生徒に求める学習活動は、教師の研究活動つまり、教師間において問いを共有したり協働的な取組をしたりすることと同様であり、これをなくして生徒に浸透するはずはない。教師も同じ構造で研究する（学び合う）ことが大切であると考え。

5 ボトムアップ体制による研究推進

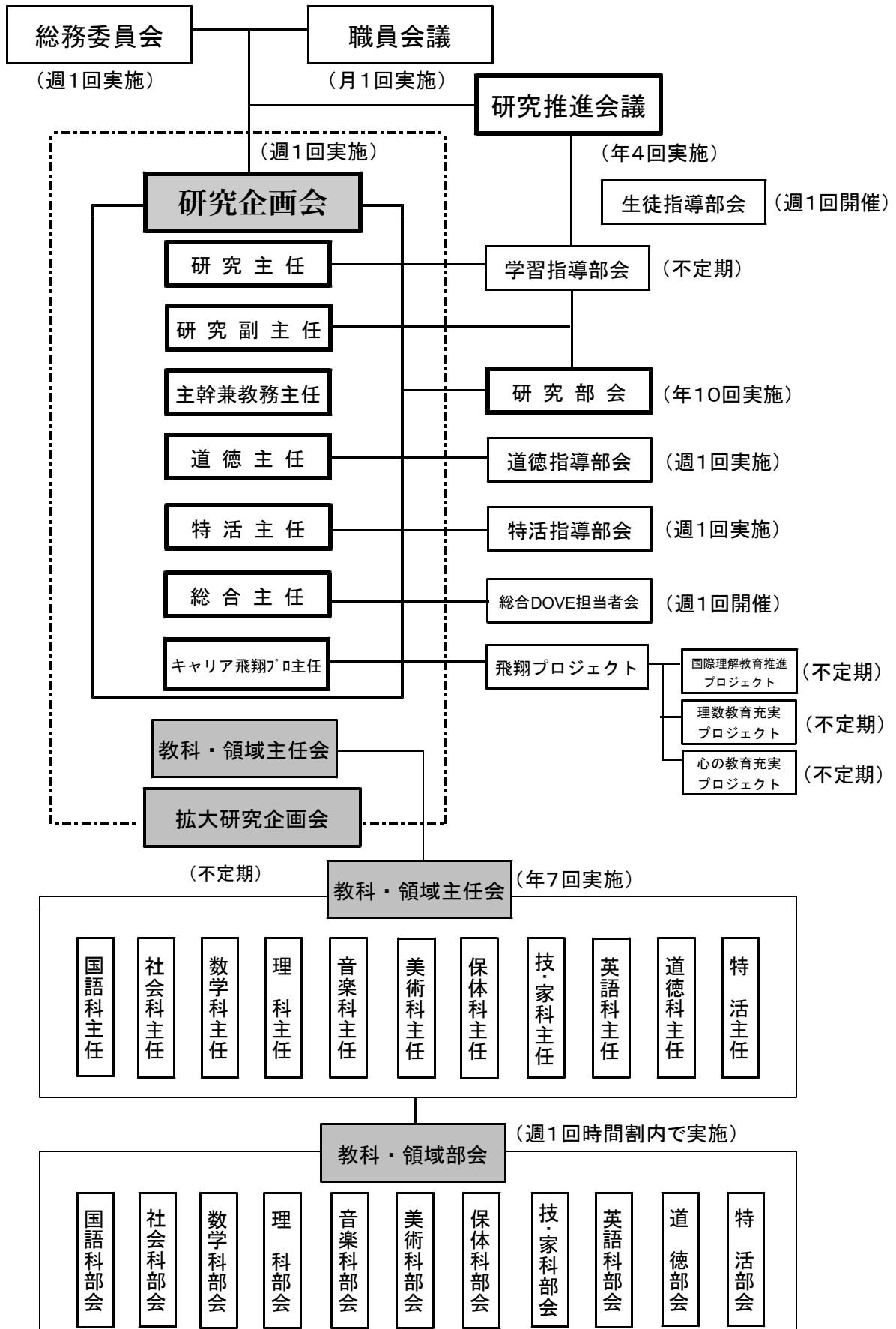
学校全体として目指す方向を共通理解し、各教科等の特質を存分に発揮するために、研究の具体は各教科等のボトムアップによる体制をとる。

平成30年度・令和元年度・令和2年度 研究計画

年 次	具 体 的 な 研 究 活 動 の 内 容
平成30年度 〔研究1年次〕	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 「求める生徒の姿」の共通理解 <input type="checkbox"/> 研究理論（全体・各教科等）の構築・提案 研究主題・研究仮説・1年次副主題の設定 <input type="checkbox"/> 研究の重点に基づく実践 ◆ 春季授業研究会（5月）国語，美術科 ★ 公開研究協議会（6月1日） <input type="checkbox"/> 授業実践記録の作成 ◆ DOVE ACADEMY による研究成果の検証（10月） ◆ 秋季授業研究会（オープン研修会）＜道徳科・特活＞（11月） ◆ 校内授業研究会「授業を見合う会」各教科 <input type="checkbox"/> 実践を踏まえての年間指導計画の見直し <input type="checkbox"/> 1年次研究の成果と課題を踏まえた理論の修正（全体・各教科部） <input type="checkbox"/> 各教科の次年度研究の重点の検討（→研究紀要の作成）
令和元年度 〔研究2年次〕	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 研究理論（全体・各教科等）の修正案の提示 研究主題・研究仮説・研究副主題の見直し <input type="checkbox"/> 具体的な実践の推進 ◆ 春季授業研究会（5月）社会，保健体育科 ★ 公開研究協議会（6月） <input type="checkbox"/> 授業実践記録の作成・蓄積 <input type="checkbox"/> 公開授業の成果と課題を踏まえた理論の修正（全体・各教科部） ◆ DOVE ACADEMY による研究成果の検証（10月） ◆ 秋季授業研究会（オープン研修会）＜道徳科・特活＞ ◆ 校内授業研究会「授業を見合う会」各教科 <input type="checkbox"/> 実践を踏まえての年間指導計画の見直し <input type="checkbox"/> 2年次研究の成果と課題を踏まえての理論再修正 <input type="checkbox"/> 各教科の次年度研究の重点の検討（→研究紀要の作成）
令和2年度 〔研究3年次〕	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 生徒の姿の変容を基にした理論の検証と今次研究全体の総括 <input type="checkbox"/> 研究理論，成果と課題の発信 ◆ 春季校内授業研究会（5月）数学，技術・家庭科 ★ 公開研究協議会（6月） <input type="checkbox"/> 授業実践記録の作成・蓄積 ◆ DOVE ACADEMYによる研究成果の検証（10月） ◆ 秋季授業研究会（オープン研修会）＜道徳・特活＞ ◆ 校内授業研究会「授業を見合う会」各教科 <input type="checkbox"/> 実践を踏まえての年間指導計画の見直し <input type="checkbox"/> 新たな研究視点の検討（→新研究の立ち上げ） <input type="checkbox"/> 各教科等の次年度研究の重点の検討（→研究紀要の作成）

月	主 な 取 組
4	研究推進会議：研究内容の共通理解、共同研究者との連携 春季校内研：共通実践の分析・研究の軌道修正（Check 2） 公開協議会：改善点を踏まえた共通実践（Action）
5	
6	
7	次年度研究の構想立案（Plan 1） ①実践記録の作成→成果と課題の分類と整理→継続と改善の検証 ②課題の焦点化および課題の解決方法検討 ③2学期以降の授業改善の具体的な取組決定 ④次年度研究の方針提案 DOVE ACADEMY：全体的能力の見取り（Check 3）
8	
9	
10	
11	研究推進会議：次年度研究の方針決定（Plan 2） 秋季校内研：次年度研究に向けての提案 授業を見合う会：各教科による次年度研究の共通実践（Do）
12	
1	
2	紀要作成：各教科・領域による次年度研究の軌道修正 研究推進会議：次年度研究の修正点の確認（Check 1）
3	

研究組織



【引用文献等】

- 佐伯 胖 著『『わかる』ということの意味』（岩波新書 1995年）
- 佐伯 胖 著「学びの構造」（東洋館出版 1975年）
- 森 和彦 著「質的情意面に焦点化した観点別学習自己評価法（NE S）の実践活用に関する探索的考察」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第32号，2010年
- ドミニク・S・ライチェン ローラ・H・サルガニク編著
「キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして」（明石書店 2006年）
- 荻谷 剛彦 著「知的複眼思考法」（講談社 1996年）
- 高村 泰雄 著「日本の教育6 教育の過程と方法」（新日本出版社 1976年）
- 加藤 明 著「プロ教師のコンピテンシー」（明治図書 2008年）
- 小玉 重夫 著「学力幻想」（筑摩書房 2013年）
- 文部科学省 「中学校学習指導要領」（2017年）
- 楠見 孝，子安 増生，道田 泰司 編
「批判的思考を育むー学士力と社会人基礎力の基盤形成ー」（有斐閣 2011年）
- 楠見 孝，道田 泰司 編
「批判的思考ー21世紀を生きぬくリテラシーの基盤ー」（新曜社 2015年）

【参考文献等】

- 佐伯 胖 著「認知への動機づけ」（東京大学出版会 1982年）
- 佐伯 胖 著『『学び』を問いつづけて』（小学館 2005年）
- 浅田 匡 編著「成長する教師ー教師学への誘いー」（金子書房 1998年）
- 秋田喜代美 著「授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない」（明石書店 2008年）
- 秋田喜代美 著「子どもをはぐくむ授業づくり 知の創造へ」（岩波書店 2000年）
- 市川 伸一 著『『教えて考えさせる授業』を創る』（図書文化 2008年）
- 豊田ひさき 著「学び合い育ち合う学習集団づくり」（明治図書 2001年）
- 豊田ひさき 著「集団思考の授業づくりと発問力」（明治図書 2007年）
- 日本教育新聞社関西支社編
「新学習指導要領とこれからの学校」（日本教育新聞社 2008年）
- 小玉 重夫 著「シティズンシップの教育思想」（白澤社 2003年）
- 藤村 宣之 著「数学的・科学的リテラシーの心理学」（有斐閣 2012年）
- 松下 佳代 著「パフォーマンス評価ー子どもの思考と表現を評価するー」（日本標準 2007年）
- 国立教育政策研究所
「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～」（2015年）
- 石井 英真 著「今求められるが学力と学びとは～コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影～」（日本標準 2015年）
- 田村 学 著「授業を磨く」（東洋館出版社 2015年）
- 石井 英真 著「中教審『答申』を読み解く」（日本標準 2017年）
- 柴田 義松 著「批判的思考力を育てる～授業と学習集団の実践～」（日本標準 2006年）
- 松尾 知明 著「未来を拓く資質・能力と新しい教育課程」（学事出版 2016年）
- 長谷川 元洋 監修・著／松阪市立三雲中学校編著
「無理なくできる学校のICT活用」（学事出版 2016年）
- 石川 一喜・小貫 仁・著
「教育ファシリテーターになろう！」（弘文堂 2015年）

※ 上記は，平成21～令和元年度の研究における文献を含む。